
あなたに逢いたい

辻 和美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あなたに逢いたい

【EZコード】

N2509D

【作者名】

辻 和美

【あらすじ】

クリスマスの物語です。誰も信じられない主人公、優菜が夢の中であつた彼とクリスマスに会う約束をして…。あなたにも愛が届きますように…

「25日、またこの場所で逢おうな…
その言葉だけを信じて私は待っている…

私は優菜…中一。

友達はない。

どうしてかつていうと私は見た目が派手だから。クラスでは浮いた存在になつてている。

髪は茶色、ピアスに化粧…

みんなあまり関わりたくないらしい。

それでいいんだ…それで。

友達なんていらない…

家族なんていらない…

信じられるのは自分だけ。

こんな私でも去年までは普通の女の子してた。
友達もいた。

でもその友達…華はとんでもないヤツだった。
確かあの日はそう…

華に連れられて買い物に出かけて…

華にアクセサリーを鞄に入れられて私は万引き犯にさせられた。

私が華が好きだった友樹と付き合い始めたのが気に入らなかつたらしい。

私じゃないつて何度も先生や両親や友達にも話したけど…
誰も信じてくれなかつた。

その日から決めたんだ…
私は誰もいらないって。

あれだけ仲良くしてたつて…

14年も一緒に過ごした家族だつて…

私を好きだつて言つてくれた友樹だつて…
結局誰一人、私を信じてくれなかつた。

口先だけの友達なんて

家族なんて

彼氏なんているもんか。それから私はどんどん派手になつていつた。
前は「優菜が万引きするなんて信じられないね」なんていつた子も
いたけど今じや

「やっぱり優菜はそういう子だつたんだ」つてみんなに思われてる
ようだ。

外見変えただけで私は何にも変わつてないんだけど…。

まあそんな感じで退屈な日々を過ぐしていた。

12月になるとみんな一斉にクリスマスマード一色になり、ますま
す私には遠い世界になつてきた。

だつて…誰も信じられない私がサンタなんて信じられるわけないじ
ゃん。

クリスマスなんてなくなればいい…そう思つた。

それからしばらくたつたある日私は夢をみた。

とても暖かくて…心地よい夢。

私の隣には知らない男がいて…

泣いてる私をずっと抱きしめてくれている。

私が何故泣いているのかとか、その男が誰なのかとかはよく覚えて
いないけど、抱きしめられた感触はしばらく残つていた。

その男は一言だけ呟いた。「25日、この場所で待つてるから

それだけ言い終わると同時に私は夢から覚めた。

そう…これは夢の話。

こんなこと現実にあるわけない。

何を馬鹿なことをつていつもの私なら思つんだけど、夢の中の男は
ほんとにいるんじやないか…なんて思った。

自分でも馬鹿だなつて思う。

友達も彼氏も信じられなくてましてや家族も信じられない私が夢の話を信じようとしてるなんて。

でも彼の胸の中は本当に温かかった。

安心できた。

できれば彼が実在してほしい…そういう願望があるからかもしれない。

私が私でいれる場所…彼の傍は私の居場所があった。ほんとにただの夢の話。

私は自分に言い聞かせる。

だからそんなこと現実に起こるはずがない。

そう… そんなんだけど… 現実には1%もないかもしれない。だけど私は信じてみたかった。

誰も信じられなかつた私に信じてみたい人が現れた。

だから私はこの場所で待つていて。

朝からずつと…ずつとずつと。

頭の中では来るはずないってわかってる…

でも体は待ちたがってる。

あの温かい胸の中に包まれたいって思つてゐる。

名前も何もわからない彼。

もう一度逢いたい…私は何時までも待つつもりでいた。
う~寒い。

昼頃から急に天氣が悪くなつて来て雪がふり出してきた。みんな急ぎ足でいくべき場所へ向かっていく。

私にはいく所なんてない。

待つてる人なんていない…

私がどうなつても誰も心配なんてしない。

私は彼にもし会えたらサンタを信じてみようつてポケットに小さなツリーを入れて來ていた。

ずっと信じていたサンタ…ポケットからそのツリーを取り出してみた。

やつぱりサンタなんていらないんだ…
わかっていたことなんだけど。

雪の舞う公園で私はたつた一人…

私を待つてる人もいなければ私が待つ人も現れない…
気がつくと私は泣いていた…

おかしいな…一人でいることなんでもう慣れっこなのに…
涙がとまらない…馬鹿だな…もう帰ろう…

私は持っていたツリーを公園に埋めた。

するとツリーはどんどん大きな木になつてゆく。

私が今までみたことないくらい大きなツリー。

私はただただ驚いてそのツリーを眺めていた。
そしてツリーは光り出した…

すると…バタバタバタと誰かが走つてくる音がする…

「あつた…ホントにあつたツリー…」

私が後ろを振り向くと…彼がたつっていた。

私がずっと待つていた人…

まさかほんとにいるなんて…

私は涙が溢れて止まらない…

彼は私を抱きしめた

「ごめんな…こんな寒いのにずっと待つていたのか？」
こくん…私は頷く。

「俺…夢だから誰も待つてるはずないって思つて来なかつたんだ。
でもこの大きなツリーを見つけて…夢と同じだつたからもしかした
らつて急いできたんだ。」

「そうだつたね…夢の中で大きなツリーの下であなたと逢つたんだ

よね…まさかほんとになるなんて…信じられない。」

私達はぎゅっと抱きしめあつた。

互いに相手が消えていきそうな気がして。

力いっぱい抱きしめた。

名前も何も知らない二人だけ…

誰よりお互いを解つていてる気がした。

「ねえ？これは夢じやないよね？」

「ああ、夢じやない…夢はここで終わつていただろ？」

と彼は私にキスをした…

私は幸せでいっぱいだった…

「やつぱりサンタはいたのかな？」

「サンタが俺達を結び付けてくれたのかも…」

私にも大切な人が見つかった…この愛を大切に育んでいきたい…

HAPPY MERRY CHRISTMAS
あなたにも愛が届きますように…

— END —

(後書き)

読んでいただきありがとうございました

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2509d/>

あなたに逢いたい

2010年12月8日13時18分発行